

鑑賞の授業のための名曲&名盤〈クラシック〉

国土潤一

ムソルグスキー（ラヴェル編）「展覧会の絵」

モデスト・ムソルグスキー（1839—1881）は、貴族階級の出身で、ボロディン、キューイ、リムスキー＝コルサコフ、そして彼の作曲の師バラキレフと共に「ロシア五人組」の1人として、ロシア国民楽派の確立に大きく寄与した。《展覧会の絵》はもともと、1874年、友人の建築家ヴィクトル・ハルトマンの遺作絵画展に因んで作曲したピアノ独奏曲である。ハルトマンの絵を素材とした10曲の小品を、冒頭をはじめ、いくつかの曲間にプロムナードを配してつなぐ構成は、ムソルグスキーの奔放で豪快な音楽性の発露ともなっている。

この意欲作をオーケストラ化するアイデアを名指揮者クーセヴィツキーはもつ。その編曲はオーケストラレーションの天才モーリス・ラヴェル（1875—1937）に依頼され、1922年10月19日、オーケストラ版《展覧会の絵》はクーセヴィツキーの指揮で、パリで初演された。（注）

ロシアの香りのぶんぶんするこの作品に、ラヴェルはフランスの芳香を加えた。オーケストラ版《展覧会の絵》は、このロシア的要素とフランス的要素のバランス配分によっても、様々な演奏の可能性をもっている。ラヴェルの編曲に対するアンチ・テーゼとして、他の編曲版も数多く存在している。名指揮者ストコフスキー（1822—1977）の編曲以外にも、ゴルチャコフ、アシケナージ、ナウモフ等々、多くの版が存在しているが、オリジナルのピアノ版との比較は、音色とイメージに対する様々な可能性を教えてくれる。

（注）初演者クーセヴィツキーが1930年にボストン交響楽団と演奏した歴史的録音も入手できる。（BMGFファンハウス、BVCC38247）

カラヤン指揮／ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

【ソニー・ミュージック・エンタテインメント DVD：SLBC37】

20世紀後半を代表する指揮者であるカラヤンは、この曲を録音だけでも3度行なっており、そのいずれもが素晴らしい名演であるが、86年のこの映像は、老境に入ったカラヤンの気宇壮大な音楽作りと、世界一の名手を揃えたオーケストラであるベルリン・フィルの華麗な演奏の姿を視覚化したという点で、格別の面白さを誇っている。同じ年の録音と同一音源による映像とおもわれるが、ベルリン・フィルとの旧録音（1965、1966年）との比較も面白いだろう。一人の指揮者の変化と、オーケストラ技術の進歩、そして、それと音楽の感銘の比較が体感できよう。

マズア指揮／ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

【ジェネオン エンタテインメント DVD：GNBC4033】

編曲という作業は、原曲の中から編曲者が何を抽出し、何を感得したかを教えてくれる。ラヴェルの華麗なオーケストレーションに対し、旧ソ連の作曲家セルゲイ・ゴルチャコフ（1905—1976）が1954年に編曲した版による演奏は、よりロシア的な色彩が濃厚になっている。ラヴェルの手法を踏襲した部分もあるとはいえ、その受ける印象は、ずいぶんと異なっているはずである。映像によって鑑賞できるのも、オーケストラの楽器の様相を知覚する上で、聴覚のみの録音よりも、より理解しやすくなっているだろう。編曲の可能性を知る上でも興味深い。

チェリビダッケ指揮／シュトゥットガルト放送交響楽団

【ユニバーサルミュージック CD：POCG10193】

ラヴェルのオーケストレーションの妙は、皆が異口同音に賞賛するところだが、そのことを改めて実感させてくれる名演が、この1976年の放送録音であるチェリビダッケの旧録音だ。独自のオーケストラ訓練の理念をもち、音楽哲学をもったチェリビダッケの真価が広く知れわたったのは、70年代のシュトゥットガルト放送響時代以降であった。この完璧にコントロールされたオーケストラのアンサンブルは、壮年期のチェリビダッケの音楽への気迫と共に、ラヴェル版《展覧会の絵》の魅力を増加させてくれる。ミュンヘン・フィルとの再録音も興味深い名演だ。

ゲルギエフ指揮／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

【ユニバーサルミュージック CD：UCCP 1053】

ラヴェルはフランス的な美意識と色彩感を背景としながらロシアのムソルグスキーの音楽をオーケストラ用に編曲した。そのスコアからロシアの匂いを濃厚に掘り起こしつつ、なおかつインターナショナルなスタイルにも適応した名演が、サンクトペテルブルクのキーロフ歌劇場の主・ゲルギエフがウィーン・フィルを指揮したこの録音である。多くのロシアの音楽家たちは、このスコアの中からムソルグスキーの音楽だけを抽出してしまう。ゲルギエフはムソルグスキーを土台として、ラヴェルにも敬意を払った。ダイナミックな名演奏である。

オリヴァー・ナッセン指揮／クレーヴランド管弦楽団

【ユニバーサルミュージック CD：UCCG1188】

ラヴェルの編曲以外にもっとも広く知られているのが、レオポルド・ストコフスキーによるもの。映画《オーケストラの少女》やディズニーの《ファンタジア》で知られるこのオルガニスト出身の名指揮者は、オーケストラの色彩感の表出に優れた能力を発揮し、けれん味とも取れるほどの表現意欲に溢れた音楽を奏でた。ストコフスキー自身の録音も残されているが（KICC8608）、現代イギリスが誇る名作曲家で、注目すべき指揮者でもあるオリヴァー・ナッセン（1952～）が、クレーヴランド管弦楽団を指揮した新録音は、オーケストラの技量も含めて、より魅力的だ。

エフゲニー・キーシン（P）

【BMGFファンハウス CD：BVCC31061】

ムソルグスキーはバラキレフに師事したとはいえ、なかばアマチュアの作曲家であった。《展覧会の絵》も、半端なピアノ演奏ならばラヴェル編曲の方が面白く感じられるのも、ここに起因している。ホロヴィッツやリヒテルの歴史的な名演にしても、決して万全ではなかったし、ラヴェルの編曲を忘れさせてくれるほどの完成度には至っていなかった。キーシンが2001年に録音したCD演奏は、本当にはじめて、このオリジナルのピアノ版が、本来あるべき響きを獲得し、その真価を音として示した演奏と言っても過言ではあるまい。圧倒的完成度の名演だ。